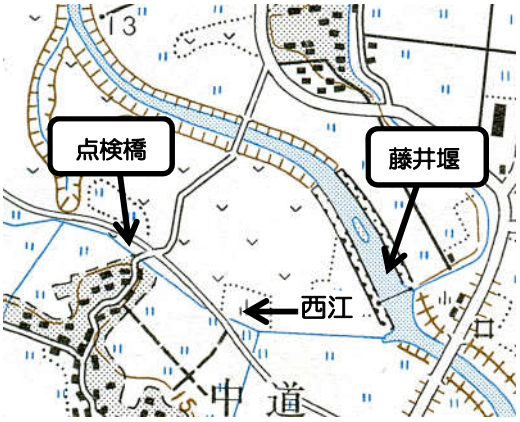
「柏崎の橋」　５９　点検橋（安田）

鯖石川は、平井地内の藤井堰から西側へ用水が分岐する。中道（なかんどう）～三ツ家（みつや）集落を通って、東中学校方面へ流れるこの用水を西江という。点検橋はこの西江にかかる橋である。橋は昭和中頃まで土橋であったが、今ではコンクリート橋になっている。なお、点検橋の向かいにある家の屋号を「橋向」といい、橋の近くの家は「橋ばた」という。



国土地理院発行　２万５千分の１地形図
『柏崎』（平成１５年発行）を掲載

頑強な鎧堰の藤井堰、西江・東江の用水は、刈羽郡奉行青山瀬兵衛により整備されたことで知られている。その工事は１０年の歳月をかけた大事業であった。しかしながら、鯖石川の氾濫による被害は収まらず、その後も藤井堰は度々改修工事が行われた。明治５年（１８７７年）藤井堰の水下組合２２か村は「越後国刈羽郡藤井堰御普請箇所書上帳」（柏崎土地改良区所蔵）を柏崎県への経費支援願いの資料として提出した。書上帳の内容は、藩政期の藤井堰普請や領主の支援、水下村と助郷村の負担差等であった。この中には「字点検橋」という項目があり、長さ九間幅三尺五寸の板橋で、橋の普請は前々より、水下組合２２か村で行っていたと記されている。

古老が伝え聞いた話によれば、点検橋は、藤井堰の工事の際、人夫が土を籠で運ぶ回数を点検・確認していた場所だという。点検橋からは、工事のために土を取る場所（土取場）から藤井堰まで見渡すことができる。

藤井堰の維持に農民の労役負担は大きいものであった。洪水となれば、堰下の農民は男衆も女衆も駆けつけ、日夜をついでの修復を行った。両田尻の歌人酒井薫風（くんぷう）は、半田・茨目の人夫の男女が列をなして家の前の街道を通っていくのを見たと『田尻のはなし』に記している。

また、藤井堰にまつわる「二郎さが淵」という哀話が次のように伝わる。

「大水による堰普請の時、『二郎さ』という美しい声を持つ年頃の美男子が人夫として働いていた。娘衆は二郎さにすっかり魅せられ、他の男を相手にしなくなったため、男衆はこれに腹を立てていた。そしてある日、川の流れをせき止めるため、土を入れた俵を堰に投げ込む作業の時、男衆は腹いせに、二郎さを土俵もろとも堰につき落とし生き埋めにした。」

今では、点検橋の名も場所も知らない地元の人が多く、伝える記録も少ない。柏崎甚句調の文句に「あがる点検　二郎さが見えない　見えない筈だよ　土俵の下」と残されているくらいである。しかし、点検橋からは先人の治水への熱意と、柏崎の平野を守った農民の姿を知ることができる。見落としそうな小さな橋だが、語り継ぐべき大切な橋である。

●参考にした本
『田尻村のはなし』（２２４　サカ）酒井薫風 著
『近世の藤井堰と東江・西江』（２２４　Ｋトチ）
柏崎土地改良区 編
『田尻のほりおこし　第３号』（２２４　タシ）
柏崎市田尻公民館 編